断章

三鬼清一郎

私が筧君と最初に出会ったのは、彼が大学二年生の秋、教養部から文学部に進学するときであった。そのころの名古屋大学には、古代史に早川庄八、中世史に網野善彦の両氏がおられ、山口啓二先生が着任される直前であった。すでに古代史を専攻することを決めていたようであるが、幅広い関心を持って地道に勉強しており、ときには『資本論』をポケットにしのばせているようなこともあった。スポーツは苦手で、コンパで唱ったのも聞いたことはないが、討論などには積極的に参加していた。

筧君は卒論では古代史を選び、それなりに準備をしていたが、直前に同じ問題を扱った論文が学術雑誌に発表されるという、予期しない事態が発生した。提出の期日は迫っており、その論文を批判的に検討して独自の考えをのべることは不可能なため、留年を余儀なくさせられた。しかし、結果としてそれが、彼の学問の幅を廣くすることになったと思われる。翌年、ややテーマを変えて卒論を書き大学院に進学した。その後は早川さんの指導よろしき

を得て、研究者としての道をすすんでいく。

オーバー・ドクターともなれば、誰しも就職に焦りがでてくる。すでに結婚していたこともあって、筧君にその気持は強かったと思われるが、やがて文学部の留学生担当の講師ポストに就くことができた。授業では日本文化の伝統や特質などを分かりやすく解説し、日常的な世話を親身に行っていた。留学生からの信頼が厚かったことは、皆が認めている。

その二年後、筧君は神奈川大学に採用されるという幸運に恵まれた。すでに網野さんは神大に移っておられ、常民文化研究所を中心に華々しく活躍されていたが、この人事との関係は全くない。筧君の能力や将来性を認めて下さった中島先生をはじめ、外国語学部の方々のご厚意に、私は今もって感謝している。

さらに、私自身も神大にお招きいただくことになった。それを知った筧君は、「網野さんが退職されたあとに、また自分の昔を知っているのが来るとは……」と慨嘆したそうであるが、その気持はよく分かる。ともかく彼とは二度目の同僚となる結果となったが、その関係は一年たたずして終りとなってしまった。

筧君は大学院の歴史民俗資料学研究科の古代史を担当し、熱心な指導を行っていた。研究分野でも、古代の政治外交史、とりわけ王権の問題に深い関心を示し、新たな分野の開拓をすすめる途上にあった。その成果は、名古屋古代史研究会の人々によって整理され、近く刊行されることになっている。筧君は、その業績とともに学問の世界で今後も生き続け、人々の記憶にとどめられるであろうが、もはや彼自身と現世で会うことはできない。かえすがえすも残念なことである。謹んでご冥福をお祈りする次第である。